玉造小町壯衰書研究

―幸地噌上詠之賦考―

杤尾　武

京大本『玉造小町抄』の注に幸地噌上詠之賦といふ事いまにかんかへす」と述べるように、玉造小町壯衰書には古来いくつかの謎があり、成立・作者未詳に加え、幸地云々は手掛りがなかった。筆者は幸地云々が他の謎を解く鍵になるものと信ずるものである。

今の段階でほの見えることがらは、玉造小町壯衰書の作者が傳説でいう空海でないにしろ、眞言宗を信奉する文人で平安後期の學者、すくなくとも佛典に通じ、漢詩文・佛典の音義に習熟していた人物であったということである。

筆者は「幸地噌上詠之賦」は『曹植路上詠之賦』であることに確信

を得た。以下これについて見解を述べよう。

幸地噂上詠之賦に對する句が「樂天秦中吟之詩」である。抄はこれに注して「樂天は白樂天也唐の世にかくれなき詩人也秦中吟は白氏文集の第二の卷にのせたり、秦中吟の詩十首あり、いつれも五言の長篇なり、今此詩五言の長篇にて秦中吟の詩の風躰をまなびてつくれるとの義なり、秦中吟は白樂天か長安といふ所に居たる時つくれる詩也、長安とは唐の世のみやこ也此長安むかしの秦の國のうちなれは秦中吟といへり」というように、平安時代白詩傳來以來最大の人氣を誇る唐代詩人の秦中吟を一方に配し、それに對するに幸地の噂上詠之賦ではあまりにも不自然で思議すべからざるべきものであろう。當然白樂天に匹敵する有名人物の文でなくてはならぬ。そこで、曹植の路上詠之賦でなくてはならぬ理由をなるべく簡潔に述べてみよう。

一　曹植の日本文學史上の位置

魏の曹植（一九二―二三二）は魏の武帝曹操の第三子で、文帝（曹丕）の弟、字を子建という。天才的文才をもち、兄の文帝に疾妬され、七歩あるく間に詩を作れと命ぜられ、七歩の詩を作り、危く難をまぬ

かれた故事は有名である。

大伴池主はその歌序（万葉集十七―三九七三）に「七歩成章、數篇滿紙」といい、『風土記』の法興六年（推古四年（五九六））に『伊豫湯岡碑文』（釋日本紀巻十四所收）に「才拙實慚七歩」と述べる。『懐風藻』には紀古麻呂の「秋宴」に「還愧七歩情」とうたう。空海の『文鏡秘府論』にも曹植の詩文がしばしば引用されている。中世以後は『徒然草』二九「豆の殻を焚きて豆を煮ける音のつぶつぶと鳴るを…」等奈良、平安時代以來著名であった。したがって曹植が自樂天に遜色のない人物であること論をまたない。

二　曹植のよみについて

現在、日本では曹植について「サウチ」と「サウシヨク」の二つのよみが行われている。古い例を箇條書にしてみよう。

(1) 唐・張文成（六六〇―七四一年頃在世）『遊仙窟』（陽明文庫本、和刻無刊記本48aにはよみなし）

醍醐寺本（康永三（一三四四）寫）「曹殖」

眞福寺本（文和二（一三五三）寫）「曹植」

成簣堂文庫甲本（室町期寫）「曹植」

(ロ)唐・慧琳『一切經音義』(七八三―八〇七頃成立)引『集古今佛道論衡』(高麗本巻四12b)

「曹植承力反人名也」(序文)

(ハ)後晉・可洪『藏經音義隨函録』(天福五(九四〇)引 同右

(A)「値每上與植同。除忠・除力・辰力二反。陳田心王名也。字子建。魏武帝第四子也。字雖三呼。宜取植音食。」(高麗本二九冊33b)

(B)「曹植反市力」(引『廣引明集』二九冊65a)

(ニ)空海『文鏡秘府論』(弘仁十二(八二〇)頃成立)

「曹植」(書陵部藏平安末期寫本)

「曹植洛神賦」

「曹植詩云」

「曹植・劉楨」

「粲・植」

「曹植」(六地藏本室町中期寫本)(天23b)

「曹植洛神賦」(西6a)

「曹植詩云」(西20a)

「曹植・劉楨」(南3a)

「粲植」(南5a)

(ホ)榊原篁洲(明暦―寶永三(六五六―一七〇六))『古文眞寶前集諺解大成』(天和三(一六八三)刊)

「令弟曹植七步作詩」(巻一26b 七步詩の解の文)

以上(ホ)を除いて「サウショク」のよみである。わずかに可洪の隨函録が「值」の反切として「除忠」(dio tiuŋ→ diuŋ チ)[注8]、「除力」(dio liek→ diek ショク)「辰力」(ʒiěn liek→ ʒiek ショク)の二種を示し、陳思王曹植の名であるので植の字を取り食(ショク)と發音すべきであるという。このような注解を要したことは曹植の植に値を宛て diei(チ)と發音されていた證據となる。(ロ)の植の反切「承力」(ʒieŋ liek→ ʒiek)、(ハ)の(B)の植の反切「市力」(ʒiei liek→ ʒiek)いずれも「ショク」である。

『古文眞寶』[注9]は室町時代初期に傳來し、五山僧に讀まれた。抄物や注解類が盛んに作られたが、後集である散文がよく讀まれ、詩の抄や解ゥなく、諺解大成に「サウチ」のよみをみるのみである。

諺解大成がなぜ「サウチ」とよんだか斷定できぬが中國の近世の發音が、明の『洪武正韻』[注10](洪武八(一三七五)成立)や明の梅膺祚(ばいようさく)の『字彙』(萬曆乙卯四三(一六一五)自序刊)には「眞韻 直意切 音治」と表記される。「直意」(dieK iei→ diei)の音「治」(diei)は「チ」と發音するもので現代音 tsi(チ)に近似した發音になる。「サウチ」のよみは洪武正韻のような韻書や江戸時代に日本に來ていた中國人等による影響であろう。しかし曹植が「サウチ」とよまれ、幸地と同じであるとする筆者の考え方について以下論述したい。尚ここに仮名で表記した漢字音は類似

音にすぎない。これからもこれに準ずる。

三　幸地が曹植である理由

多數の書が「曹植」を「サウシヨク」とよんでいるのに「サウチ」とあえてよんでみせるには、音義類に通じている僧か學者でなければできないことは初めに述べた。玉造小町壯衰書の作者が出典を隱し創作の秘密を樂しみやや手のこんだ細工をしているわけであるが、このような文字遊びは六朝頃の中國あるいは唐初の李嶠が『百廿詠』を作って種さがしをおもしろがったことでよく知られている。そのような手法は佛畫における隱し繪の手法に近いものである。

ここで曹植を隱すに幸地をもってしたのは、おそらく佛の幸いの地というような意味あいをもじったものと思える。

中國の傳統的な漢字辭書や音義書とこれを襲った『新撰字鏡』や『篆隸萬象名義』等、反切表記と類音字による漢字音の表記法があり、四聲の表記とともに傳統的な方法である。

いま問題にしている曹植を類音語表記にすると、「曹幸植地」となりうることが、つまり幸が曹の、地が植の類音字であり得る

かの證明が必要になる。調査に當り次の資料を用いた。

①『廣雅』魏・張揖（大和中（二二七―二三三）新式標點廣雅疏證 陳雄根 標點 中文大學出版社）

②原本『玉篇』梁・顧野王（武帝大同年間（五三五―五五一）台灣國立中央圖書館 古逸叢書所收 原本と大廣益會玉篇を合し索引を附す）

③『遊仙窟』唐・張文成（六六〇―七四一頃在世 前出）

④『一切經音義』唐・慧琳（七八三―八〇七頃成立 高麗大藏經・大正新修大藏經所收 前出）

⑤『文鏡秘府論』空海（弘仁十二年頃（八二〇）成立 前出）

⑥『藏經音義隨函錄』後晉・可洪（天福五（九四〇）成立 前出）

⑦『龍龕手鏡』遼契丹・釋行均（統和十五（九九七）中華書局 京城帝國大學影印高麗本を底本としその缺落部分を四部叢刊本で補う）

⑧『篆隸萬象名義』空海（天長七年（八三〇）以降成立 高山寺本（永久二年（一一一四）寫 崇文叢書所收）

⑨『新撰字鏡』昌住（昌泰年間（八九八―九〇一）末～延喜（九〇一―九二三）のはじめ成立 臨川書店）

⑩『廣韻』陳彭年（宋・大中祥符元（一〇〇八）大宗重修廣韻『互註校正宋本廣韻』（余迺永校著 聯貫出版社）

⑪『大廣益會玉篇』陳彭年（宋・大中祥符六（一〇一三）成立 ②と合本）

⑫『集韻』宋・丁度（景祐四年（一〇三七）成立 上海古籍出版社）

⑬觀智院本『類聚名義抄』（建長三（一二五一）轉寫 風間書房）

⑭『古今韻會舉要』元・熊忠（大德元（一二九七）成立 台灣文化書局）

⑮『聚分韻略』虎關師錬（鎌倉末朝北朝初 嘉元四（一三〇六）自序 德治二年（一三〇七）山一寧跋 風間書房）の研究 奥村三雄著

右の資料に基き曹・幸・植・地字につき反切その他必要なものを表にしてみよう。

	曹 dzau	幸 hɛŋ	植 diej	地 dii
玉篇 糸	固 𢀜 似勞反。曹字書 今𢀜字也 𢀜 似勞反。韓作勞反書字 嘈才刀反喧聲 𢀜 昨勞切。蘇曹字… 嘈才刀切聲也	固 幸 女涉反。讀若敎 𢀜 幸 加涉反 𢀜 夰 女涉切。白大也也今作幸 夰 戶耿切…今作幸	𢀜 植 時職反置立槌 𢀜 植 時職切…又除吏切	𢀜 地 題利切 墜直支切…達直反 𢀜 地 題利切
龍龕手鏡	日部六平聲 𢀜俗𢀜古 昨勞反…今與曹同 又呼鳥反	雜部九上聲 夰音幸 大部六夰正夰今尼輙反大聲下又音幸二(入聲)	木部一入聲 植常職反種也立志也置也	土部五去聲 墜直類反地又古文音地 𡑞墜丞三音地
新撰字鏡	曹曹自勞反 𢀜曹字		榻直吏反又市力反𢀜 植上字時吏時職二反	地題徒利反
廣韻	下平六豪 曹昨勞切十四 𢀜古文	上聲三九耿 幸…胡耿切	去聲七志 植直吏切種也 又市力切 入聲三四職 植常職切…置也	去聲六至 地徒四切
集韻	平聲六豪 𢀜曹財勞切 嘈廣雅嘈吟聲也 (財勞切) 入聲十三曷 吟噦吟嘈嘈吟聲也或从幸	上聲三九耿 夰幸下耿切、隸作幸	去聲六至 植時吏切音侍 去聲七志 植竹吏切宣也…鄭康成讀 去聲七志 植直吏切種也春秋傳	去聲六至 地墜丞丞徒三切 去聲二霽 地大計切
類聚名義抄	曹之槽𢀜曹 𢀜(佛ヲ) 嘈之曹嘈同佛中32 嘈噦サハク(佛) 嘈噦ヤカマシクロ62	夰乎耿反 サイ心ヒ 禾刀 幸同(佛上84)	植之實禾𢀜 …又直致反… (佛下本83)	地題利反坤、墜笛類反地 墜古 坴則天作此
古今韻會擧要	下平四豪獨用 曹財勞切	上聲二三 梗與耿靜通 幸下耿切	去聲四 寘與至志通 植直利切種也 又樹也	去聲四 寘與至志通 地徒二切
聚分韻略	豪第四下平 曹 ソウ 非 ヒ (慶長十子版)	梗耿靜三三上聲 幸 ヨウ 吉而免 アン ヒ也	寘至志第四去聲 植 ヶ 種ヒウヘ	寘至志第四去聲 地 ヶ 土一

	玉篇	龍龕手鏡	新撰字鏡	廣韻	集韻	類聚名義抄	古今韻會舉要	聚分韻略
𡨦	𡨦雜釋話三 曹、道也							
𡨦	𡨦 曹力古反 叅 銑 道、通、何							
𡨦	𡨦 旅力与切：旅古文 衣良與切古文旅 噌力親切 語也	方部二七上聲 旅音呂 衆也	曹力古反 叅也 銑也	上聲十姚 曹銑也：部古切	上聲十姚 曹坎 籠五切：古作坎文三十一 上聲姚 噌籠五切 語也 上聲八語 旅曹坎兩擧切 說文軍之百人為旅亦姓古作曹坎	噌ミチ僧 曹ミチ僧	上聲七 𡨦與姚通 曹籠五切	𡨦姚第七上声 噌一國

まず曹と幸の關係を解明しよう。玉造小町壯衰書の作者は空海の系統の眞言宗の僧か、その信奉者である平安後期の學者であろうと先に述べた。沼本克明氏が『日本漢字音の歴史』(東京堂出版)でいう如く「平安後期から院政期にかけての漢字音を日本漢字音として定着させた時期」漢字音が仮名で固定表記される様になった「時期に創作期が重り合うのではなかろうか。そのことは文字遊びとはいえ、中國音韻學やその影響を受けている平安中期以前の日本の狀況とは矛盾が生じる。筆者の論が成立するためには音韻面をややあいまいにして「嚴密な音韻學を横に置いての文字遊びが基盤になる。(ただし今の段階で創作時期を限定するのは無理)

玉造（以下玉造小町壯衰書をいう）作者は作品の執筆に當り用いた書物は空海の文鏡秘府論や篆隸萬象名義あるいはそのもとになった原本玉篇であり、同時に一切經音義等の佛典の音義類である。遼の僧行均の龍龕手鏡は六朝、唐の佛典の異體字類等を集めた字書であるが、この書を玉造作者が見たという證據はないが、それに用いられている音義類に目をふれた可能性は十分ある。

篆隸萬象名義十四口部の「嘈オカ反啐聲」は、オカ（dzei tau→dzau）という音と啐聲（さわがしい）の意を表わす嘈字についての音義である。嘈と曹が同義であることは龍龕手鏡で知ることができる。また嘈と曹に對する啐が同音同義であることが萬象名義や集韻でも了解できる。また手鏡の呼鳥（ho teu→heu）は曹字がコウ（カウ）に近い音を持っていた證左である。すくなくとも日本漢字音ではというにだし書き付きでいえる。

植と地の關係はどうか、「植」には去聲の寘韻と入聲の職韻があるが、「チ」と發音する寘韻が檢討の對象となる。「直吏反・竹吏切・直致反・直利切・直意切」等と反切表記されるものがこれである。『古文尚書』の金縢篇「植璧秉珪」の後漢・鄭玄の注「植、古置字」は植が置（寘韻竹吏 tiuk（lei→tlei）チ）と發音されていた古い例である。

一方「地」は眞韻の「直類反・題利反・徒利反・徒四反・徒二反」等と反切表記されるもので、徒二(do nii→dii チ)、直類(dioK lui→diui チ)と發音される。以上音韻學上矛盾は含んでいるが、文字遊びとしては曹植が幸地と書き換えることが可能であること明白である。

四 噌(畓)道上詠は路上詠である

諸本噌と曾の二種の字を用いている。いずれも上聲麌(姚)韻の字で力古(loK ko→lo ロ)籠五(lug go→lo ロ)と發音される。この曾は旅字とも通用字である。廣雅、萬象名義や後漢の鄭玄が『禮記』の郊特牲篇「臺門而旅樹」に注して、「旅、道也」とする。道はミチと訓される。名義抄は噌・曾いずれも「ミチ」と訓する。

一方「路」は集韻によると去聲ナ莫に「畓故切」(lo ko→lo ロ)と反切表記する。韻を異とするも義を同じくする通用字といえる。

玉造作者にとって路より曾が、さらに噌の方が手が込んだ遊びといえよう。後世の諸本に曾が用いられているのは字書によって改められたものであろう。

曹植の作品に路上詠之賦があるかどうか、筆者は數年前まで曹植の作品ではないかと考え學生に講じていたが、賦にかかず

らわり、改めて考えてみなかったが、賦といったのは秦中吟の詩に對する賦であるから文でもよいわけである。

『藝文類聚』三十五人部十九 愁 に魏陳思王曹植釋愁文がある。玉造の作者は藝文類聚により想を得たと思える。平安時代末期によく使われた『初學記』はもとより、『太平御覽』や『文苑英華』にも引かれていない。『日本國見在書目録』別集家に『魏曹植集卅』があるが、はたしてこの集を見たか疑問である。曹植の集は中國で得難かったという。曹植の作品は『文選』と類書と『蒙求』(384子建八斗、578陳思七步)等によって知られたのである。[注12]

玉造の作者は題名の釋愁文を隱し、文中の「行吟路邊」という第二句から題をとり、問答體にならい詩を構成している。玉造が「路邊」を「路上」としたのは邊(名義抄佛上45)上(同佛上74)いずれも「ホトリ」と共通の訓を持っていることからも容易に理解できる。いま釋愁文を引用する。

予以愁慘
行吟路邊
形容枯悴

予愁慘を以て
行ゆく路邊に吟ず
形容枯悴し

憂心如焚
有玄虛先生
見而問之曰
子將何疾
以至於斯
答曰
吾所病者愁也
先生曰
愁是何物
而能病子乎
答曰
愁之爲物
惟惚惟恍
不召自來
推之弗往
尋之不知其際
握之不盈一掌
寂寂長夜

憂心焚くが如し
玄虛先生有り
見て之に問ひて曰く
子將に何の疾にて
以て斯に至らんとするや
答へて曰く
吾病める所の者は愁なり
先生曰く
愁是何の物にて
能く子を病くや
答へて曰く
愁の物爲るや
惟惚惟恍
召かずして自ら來り
之を推せども往かず
之を尋ぬるも其際を知らず
之を握れども一掌にも盈たず
寂寂たる長き夜

或羣或黨
去來無方
亂我精爽
其來也難進
其去也易追
臨餐困哽咽
煩冤毒於酸嚏
加之以粉飾不澤
飲之以兼肴不肥
温之以火石不消
摩之以神膏不稀
受之以巧笑不悅
樂之以絲竹增悲
醫和絶思而無措
先生豈能爲我著龜乎
先生作色而言曰
予徒辯子之愁形
未知子愁所由生

或は羣れ或は黨り
去來に方無く
我精爽を亂す
其來るや進み難く
其去るや追ひ易し
餐に臨み哽咽して困み
冤に煩え酸嚏して毒む
之を加ふるに粉飾を以てすれども澤はず
之を飲むに兼肴を以てすれども肥えず
之を温むるに火石を以てすれども消えず
之を摩るに神膏を以てすれども稀がず
之を受くるに巧笑を以てすれども悅ばず
之を樂むに絲竹を以てすれども悲を增す
醫和思を絶ちて措無し　醫和 春秋秦の名醫
先生豈能く我に著龜を爲さんや
先生色を作して曰く
予徒に子の愁ふる形を辯じ
未だ子の愁の由り生ずる所を知らず

吾獨爲子言其發矣
今大道既隱
子生末季
沉溺流俗
眩惑名位
濯纓彈冠
諮諏榮貴
坐不安席
食不終味
遑遑汲汲
或慘或悴
所鬻者名
所拘者利
良由華薄
凋損正氣
吾將贈子
以無爲之藥
給子以澹泊之湯

吾獨子の爲に其の發を言はん
今大道既に隱れ
子末の季に生る
流俗に沉溺し
名位に眩惑す
纓を濯ひ冠を彈き
榮貴を諮ひ諏る
坐すれども席を安ぜず
食へども味を終さず
遑遑汲汲として
或は慘み或は悴む
鬻く所の者は名あり
拘る所の者は利あり
良に華薄に由り
正氣を凋損ふ
吾將に子に贈るに
無爲の藥を以てし
子に給するに澹泊の湯を以てせん

刺子以玄虛之針
灸子以淳朴之方
安子以恢廓之宇
坐子以寂寞之牀
使王喬與之攜手游
黃公與子詠歌而行
莊生爲子具養神之饌
老聃爲子致愛性之方
趣遐路以棲跡
乘輕雲以高翔
於是精駭意散
改心回趣
願納至言
仰崇玄度
衆愁忽然
不辭而去

子を刺すに玄虛之針を以てし
子を灸するに淳朴の方を以てす
子を安ずるに恢廓の宇を以てし
子を坐するに寂寞の牀を以てす
王喬をして子と手を攜へて游び
黃公をして子と歌を詠じて行ません
莊生は子の爲に養神の饌を具へ
老聃は子の爲に愛性の方を致さん
遐路に趣き以て棲跡し
輕雲に乘じて以て高翔せん
是に於て精駭き意散じ
心を改め趣を回らさん
願くは至言を納れ
仰いで玄度を崇めん
衆の愁忽然として
辭せずして去らん

誠に長文の引用となったが、曹植の釋愁文が幸地嚕上詠之賦

であることは證明できたと考える。

五 玉造小町壯衰書の作者についての假説

玉造の本文を讀めばすぐ氣付くことであるが、序の文に曼殊院本が「今玉造小町女寡独而辟道路」と書く以外他の諸本いずれも玉造小町の名は見當らない。したがってこの作品は玉造小町の壯衰書でなくてもよいわけである。題名は玉造小町の壯衰説話が世上に廣く流布していたために後世の何者かが題名にしてしまったのではないかという假説も成立する。そうすると空海の作に擬しても奇異には受取られないのである。

玉造の作者が空海であるとすることは直にきめかねるが、平安末期まで成立時代を下げる必要はないかもしれない。後日臨川書店から出版する予定の『玉造小町壯衰書の研究』(成城大學出版助成による)ではもう一歩論を進めたいと思う。

結び

本稿を書き終って感じることは筆者の思考過程の迷いが歴然と露出していることである。本稿で成立時代や作者を論じることはいたずらに混亂を招く結果になる。改めて論じたい。

今回の目的はあくまで『孚地噌上詠之賦』は『曹植路上詠之賦』↓『曹植釋愁文』であることが證明できれば事足りる。

ここでおぼろげにわかることは『藝文類聚』が使われたことに秘密の鍵があるように思える。『藝文類聚』は平安時代後期には『初學記』にとってかわられる。また白樂天の秦中吟も創作時代を限定する。その上、玉造の本文には玉造小町という語は一度も使われていない。もと女人壯衰書といった書名ではなかったのか、想像の輪が擴るばかりである。

参考文獻

注1 『玉造小町抄』 京都大學には他に正保四年（一六四七）の奥書を有する『玉造小町壯衰書註』があり、内容はほとんど同じ。抄には奥書はないが『註』より古い寫本である。「成城國文學論集」十八輯、「成城文藝」第一一九號「翻印 玉造小町子壯衰書七種」上下參照。

注2 玉造の作者を平安後期まで下げず空海ないしそれに近い人物も想定できるので、あくまで最下限を後期のはじめ一〇〇〇年をそう遠く離れない時期にしたい。

注3 白氏文集の傳來 記録では仁明朝に太宰少弐藤原岳守が舶載貨物中に元白詩筆（元稹と白樂天）を發見（承和五年八三八）文德實録）が古い例である。ただ傳來はもっと古く嵯峨天皇の頃だとされる。留學僧の惠蕚が蘇州の南禪院の白氏文集六十七卷を書寫して將來（承和十一（八四四））したものが金澤文庫本の祖本である。白詩が最も流行したのは菅原道眞（承和十四―延喜三年八四五―九〇三）の頃である。空海（寶龜五―承和二（七七四―八三五））の『文鏡秘府論』（弘仁十二年（八二〇）成立）には白氏文集からの引用は認められないので、空海は見ていなかった可能性が強い。玉造の文中に白樂天の秦中吟を言うのであるから、玉造の作者は空海以後白氏文集流行の影響を受けた人物である。

注4 七歩詩 この詩についての逸話はすでに引用したもののほか『十訓抄』のような説話にも

多くの引用をみる。直接詩文集(曹植集)から引用されることもあるが『蒙求』の「陳思七歩」や『李嶠百廿詠』詩の「陳思七歩才」等に導かれて有名になった。

注5 可洪『藏經音義隨函錄』昭和九年から十一年にかけて『大增上寺藏の高麗大藏經本を底本とし希覯典籍蒐集會から影印出版された。近時韓國から影印本が出ている。

注6 『文鏡秘府論』書陵部藏平安末期寫本 保延四年(一一三八)點本 昭和五年東方文化叢書(東方文化院)影印。

注7 同 六地藏本 室町中期寫本 昭和五十九年 六地藏寺善本叢書(汲古書院影印)

注8 藤堂明保編『学研漢和大字典』により中古音によって音韻表記をした。中古音は『切韻』(六〇一年)と切韻系の『廣韻』(一〇〇八年)を基準にした音系。假名表記はこれをもとにした日本漢字音。

注9 『古文眞寶』宋の黄堅が撰び元の林以正が校刪したという。室町初期に傳來し、五山僧の間で流行。桂林德昌、笑雲清三等が抄物を作ったが後集(文)に人氣があったらしい。諺解大成は江戸時代に作られた最も大部で充實した注釋書であり、現代の注釋書に影響を與えた。早稲田大學出版部から『先哲遺著漢籍國字解全書』が出版されこれに活字版で印刷された。後集諺解大成は寛文三年(一六六三)に鵜飼石齋が、前集は神原篁洲が天和三年(一六八三)に出版した。

注10 『洪武正韻』昌平坂學問所舊藏本(現内閣文庫)の明・隆慶元年(一五六七)跋刊本その他が藏される。和刻本の『五車韻瑞』(明・凌稚隆編)が萬治二年(一六五九)に出版

され、これにも洪武正韻が收められている。影印本が出ている『永樂大典』にもこれを收める。

注11 曹植の集　現在よく使われる集として清丁晏編『曹集銓評』(台灣世界書局版等)がある。

注12 文選類には釋愍文は引かれていないが、曹植の「洛神賦」やその他の詩文で奈良時代以來の日本人の心をひきつけたであろう。